

武蔵野日曜集会

我は門なり牧人なり

——ヨハネ伝第10章1～21節——

1968年1月21日

小池辰雄

檻の門 神と小羊 十字架という門 草は生命の糧 開かれた門 天門無門 煉獄に入る門
愛とはどん底の救い 七つのP 我は善き牧者 一牧者一群 「原始力」(キリスト新聞「橄欖」
への寄稿文) 復活の生命を得て与えるため

【ヨハネ10・1～21】

1 『まことに誠に汝らに告ぐ、羊の檻に門より入らずして、他より越ゆる者は盗人なり、強盗なり。2 門より入る者は、羊の牧者なり。3 門守は彼のために開き、羊はその声をきき、彼は己の羊の名を呼びて牽きいだす。4 悉く其の羊をいだしし時、これに先だちゆく、羊その声を知るによりて従うなり。5 他の者には従わず、反つて逃ぐ、他の者どもの声を知らぬ故なり』6 イエスこの譬を言い給えど、彼らその何事をかたり給うかを知らざりき。

7 この故にイエス復いて給う『まことに誠に汝らに告ぐ、我は羊の門なり。すべて我より前に来りし者は、盗人なり、羊は之に聴かざりき。9 我は門なり、おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入をなし、草を得べし。10 盗人のきたるは盗み、殺し、亡きとするの他なし。わが来るは羊に生命を得しめ、かつ豊かに得しめん為なり。11 我は善き牧者なり、善き牧者は羊のために生命を捨て。12 牧者ならず、羊も己がものならぬ雇人は、豺狼のきたるを見れば羊を棄てて逃ぐ、——豺狼は羊をうばい且ちらず——13 彼は雇人にてその羊を顧みぬ故なり。14 我は善き牧者にして、我がものを知り、我がものは我を知る、15 父の我を知り、我の父を知るが如し、我は羊のために生命を捨つ。16 我には亦この檻のものならぬ他の羊あり、之をも導かざるを得ず、彼ら是我が声をきかん、遂に一つの群ひとりの牧者となるべし。17 之によりて父は我を愛し給う、それは我ふたび生命を得んために生命を捨つる故なり。18 人これを我より取るにあらず、我みずから捨つるなり。我は之をすつる権あり、復これを得る権あり、我この命令をわが父より受けたるなり』19 これらの言によりて復ユダヤ人のうちに紛争おこり、20 その中なる多くの者いう『これは悪鬼に憑かれて気狂えり、何ぞ之にきくか』21 他の者ども言う『これは



悪鬼に憑かれたる者の言にあらず、悪鬼は盲人の目をあけ得んや』

● 檻の門

1『まことに誠に汝らに告ぐ、羊の檻^{おろ}に門より入らずして、他より越ゆる者は盗人^{ぬすびと}なり、強盗なり。2門より入る者は、羊の牧者^{ひつじかい}なり。3門守は彼のために開き、羊はその声をきき、彼は己の羊の名を呼びて牽き^ひいだす。4悉^{ことごと}く其の羊をいだしし時、これに先だちゆく、羊その声を知るによりて従うなり。5他の者には従わず、反つて逃ぐ、他の者どもの声を知らぬ故なり』6イエスこの譬^{たとえ}を言い給えど、彼らその何事をかたり給うかを知らざりき。

要するに、1節から6節は譬話です。譬話であるけれども、牧者^{ひつじかい}と羊の生活はまさにこの通りの現実である。

とにかく、檻^{おろ}の門というものは決まっている。「他から越えて入る者」とか、その次の8節のところのに、「すべて我より前に来りし者」とか、そこにも「盗人なり、強盗なり」と書いてあります。キリストがこの話をしているときにちゃんともう、「他から越える者」だとか、「我より前に来りし者」というものにおいて、イエスはもちろん、パリサイ人、学者、祭司、そういう連中を彼は考えている。要するに、いわゆるユダヤ教の指導者たち、これはみんな実は強盗であり、盗人であると。キリストの言葉はなかなか烈いですね。嫌われるのも無理はない。

「お前たちは盗人だ、強盗だ」

なんて言えば、

「なにを！」

というふうに思うに決まっている。イエスという人は恐いものがないわけです。真相真理を率直に言われる。

「門守^{かどもり}」が誰を表すかは、それはどうでもいい。ある意味においては、預言者や使徒たち。またある意味においては、神さまであるかもしれません。譬話というものは、このように解釈しなければならぬというものではない。いわゆる寓話というものは、かなりそういうものを持っています。イエスの譬話の中には多少、寓話的な要素も混じっているものもありますけれども。イエスの譬話は、「パラボレー」（比喩、寓話）という。

門守^{かどもり}は彼のために開き、羊はその声をきき、彼は己の羊の名を呼びて牽き^ひいだす。

これは非常に大事な消息ですね。羊はその声を聞く。声によって、

「ああ、あの人だ。私たちの羊飼いだ」

ということが、姿を見なくても、声でわかる。また、その声が慕わしいわけですね。みな、声音^{こゐね}というものがありますから。みな、声にはその一人びとりの色がある。



「羊の名を呼びて」

といって、一匹一匹の羊をその名において知っている。その顔において、また羊の声によって牧者は認識する。これは本当にそうだそうですね。

そういう意味において、学校の先生も自分の学生、生徒というものをそのように一人ひとりを認識してはならない。私は落第です。すぐ名前を忘れてみたり。これを私は読んでいて、大いにこれは自ら戒めなくてはいかんと思った。音楽のコンダクターはまさにその通りです。全員の、いろんな違った楽器を使いますが、その在り方が本当に掌握されていなければコンダクターの資格は絶対でない。

いわんや、神さまは、キリストは、

「神知り給う。主は知り給う」

という。この「知る」というのは全存在的に知っていただく。神に、キリストに知られたら、もう平伏さざるを得ない。また、その平伏しにおいて本当の信頼が湧いてくるわけです。

それが「知る」という世界で、牧人がいかに羊ひとつひとつを、動物にもかかわらず、よく知っているかと。羊もまた、そのように牧人の声と姿に信頼して動くかと。こういう信愛の姿ですね、牧人と羊の関係は。

これはあなたがたが直ぐ思い出すように、詩篇23篇であります。詩篇23篇は、神とイスラエル、キリストとそれを受けとる人たちの関係を表して、あれほどうるわしい詩篇はない。詩篇全150篇のうちに一番先にどれを選び出すかといったら、まず詩篇23篇でしょうね。これは人生の歌であると同時にまた、神の歴史の姿でもある。

●神と小羊

4^{てい} 悉とく其の羊をいだしし時、これに先だちてゆく、

キリストは先頭になつて行く。ということとはまた、

「我はアルファなり、オメガなり」

で、また^{しんがり}殿者であるということと同じことでもあります。キリストは、先頭にあるときは、先頭になつて進んで行く。エルサレムに向かってキリストが歩み出したときに、彼は先頭に立って歩み出した。また、外に出て進むときは牧者は先頭であるが、今度は夕方、檻に帰って、羊を檻に入れるときには、また^{しんがり}殿になつて行くということもあるのではないかと思います。

羊その声を知るによりて従うなり。

これが信頼の姿です。この羊そのものとなつたのが実は、キリスト彼自身なんです。だから、イエスは「小羊」といわれる。神が牧者で、イエス・キリストは小羊です。完全に神の意志にこれ従って動いて、自分は無力者である。羊のごとき無力者である。無力なるがゆえ



に無限力である。その消息を身につけたのがこのイエス・キリストであります。もうこの他に人生の姿は、本当の究極の姿はないわけです。神一切となつて、自分を全托して動く。そこに本当の力と自由と本当があるんです、その世界に。

5 他者には従わず、反つて逃ぐ、

そして、他のものには従わない。かえつて逃げてしまう。それを連れようとする、いやごめんだと言つて逃げてしまう。

他者どもの声を知らぬ故なり』

知るといふことがいかに信頼と一つであるかということ。だから、知と信とは聖書においては一つなんです。知信一貫であります。そういうのが「知る」ということ。ホセア書がその「知る」ということを深く言っているわけです。

●十字架という門

7 この故にイエス復またいい給う『まことに誠に汝らに告ぐ、我は羊の門なり。

今度ははつきり、イエスは、

「自分は牧場の羊を入れたり出したりするところの門である」

と言う。「門」という字はギリシア語で「ツュラ」といいまして、ドイツ語の「ツュア」や英語の「ドア」はそこから来ている。

「自分はドアである」

と。

8 すべて我より前さきに来りし者は、盗人ぬすびとなり、強盗なり、羊は之に聴かざりき。

とんでもない間違つた先駆けだと。羊の檻、天国に入れてくれるかと思つたら、実はどつこい彼らは地獄に追い込むようなやつらだと。これはマタイ伝23章に、「偽善なる学者・パリサイ人よ」と畳みかけて言っているのは、そのことなんだ。だから、「盗人、強盗」だと。

15 禍害わざわいなるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、汝らは一人の改宗者を得る

ために海陸うみおかを経めぐり、既にえれば、之を己に倍したるゲヘナの子とするな

り。(マタイ23・15)

なんて言つて、キリストはマタイ伝23章15節でもの凄い悪口を言ってますが。「汝らは」と言つて、もう面と向かつて烈しいことを仰る。まあ、ルターも相当悪口屋だし、キルケゴールも悪口屋だけでも、キリストにはやつぱりかなわんですな。

9 我は門なり、

と。非常にはつきりしている。今日は、「我は門なり、牧人なり」という題です。「私は門だ」と。

おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入でいりをなし、草を得べし。

この9節は非常に注目すべき言葉です。



「我は門なり」

と。これはいつも私が言います、門の中に十字架を書く、「門構えに十」の字です。

「私は十字架の門だ」

ということ。私たちにとって、

「キリストという方は門である」

と言うときに、彼の十字架が即ち門である。我々が天国に入ろうとするときに、この十字架を通らないでは、十字架という門を通らないでは、入るわけにいかない。他から入ったら、それはとんでもない間違い。

神人合一なんて言つてね、いきなりただ冥想して神さまの中に入ろうとしたら、そういった意味における神秘主義はちよつとうまくない。

神秘というなら、キリストは東西古今を絶するところの最大の神秘家です。キリスト以上の神秘家はありません。イエスはこの聖霊によつて神さまと完全に交わりのできた、彼自身が聖霊の権化のごとき人ですから。お釈迦さんも誰もみんな、キリストにはかなわん。私はもうはつきり言います、

「キリストは最大の神秘家である」

と。我々はまた、このキリストの十字架という門を通つて、

「ここに入る者は救われる」

とちゃんと書いてある。この門に入るならば、

「この関を透得するならば乾坤独歩」

と言うが、この門を通れば乾坤独歩自在である。しかし、門を通つただけでは、そう簡単にはいかない。

●草は生命の糧

「門を通つた者は救われる」

というのは、罪から、罪の世界から救い出される。私たちが、「救われていない」というのは、自我という、自己に囚われる我執というやつが罪ですから。その我執から解放されるのが「救い」なんですから、我執は十字架の贖いに、贖罪によらなければならぬ。その贖罪の十字架であるから、もう我執、自分からぬけてしまっている。

「まだぬけません」

なんて言ったらダメですよ。あいかわらずぬけなくたって、そんなことはいい。

「我執からとり外されたそういう現実がお前の中に無条件に与えられる」

ということ。もうそれには、「はい」と言うよりほかにない。

「それでも」なんて言うことは、現実の自分を見ているから、「それでも」なんだ。私だつて、現実の自分を見れば、「それでも」ですよ。



「それでもまだダメでございます」

と。その通りです。しかし、ダメの奥にダメでない世界を見るか見ないか、そこが信仰の大きな分かれ目なんです。

普通はみんなこの信仰というものを、何か現実にもそうなっていないかならないかのごとく思っているけれども、そうではない。そんな相対的な成ったような世界は「かの如く」で、そんなものは偽りですよ。本当に「成った」という世界は、与えられた所与の世界です。「ガーベ」(与えられたもの)なんだ。

十字架において無罪、無我、無私という、そういう事態が与えられて、すつ飛ばされた。しかし、そこは空である。すつ飛ばされて空だからね。空のところに——それでボヤボヤしたら今度はサタンが入ってくる——サタンが入らないためにその空の世界が充満する。そこが即ち、「草」という世界。豊かに草が与えられる。この場合は、草は生命の糧でしよ。魂の生命の糧は霊、神の霊でしよ。だから、

9 我は門なり、おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入をなし、

自由自在にそこが出入りでき、

草を得べし

霊的な食物が得られるぞと。霊的な食物とは聖霊である。だから、この9節に十字架と聖霊の事態がちゃんと語られてある。

「聞く耳ある者は聞くべし」

とキリストは言うわけです。

「出入りをなし」は、「ゴーイン、ゴーアウト」と言うね。「エイセルコマイ、エクセルコマイ」という字ですが。もう、自分に囚われないから自由自在に動けるわけです。その門の中に入る。また門の外に出て——往相と還相だな——そして、大いに今度は、我々で言えば、証をなしていくことです。今、私たちがこうやって集会をしているのは門の中に入っている事態です。門の中で——まあ「門の中」と言ってもいいし、この場合の「門の中」ということは、その中にたくさん牧草があるという意味で、普通の多いとはちよつと違うね——天国の中に入り、また地界にやってきて、門から出て、大いに俗界で証をする。これが自由自在ということ。中に入って行けば、その世界は無限の牧場である。広々とした牧場で、草は豊かにある。その次に「豊かに」と書いてある。

10 盗人のきたるは盗み、殺し、亡きんとするの他なし。わが来るは羊に生命

を得しめ、かつ豊かに得しめん為なり。

このことです。この場合の「生命」というのは特に「ゾーエーン」という字が書いてあります。豊かに生命を、限りなきところの生命を、無量寿を与えると。聖霊が即ち、無量寿の内容です。それは祈りをもって。いつも申し上げているとおり、祈りとは自分を投げ出して、本当に生命を受けることが祈りです。キリストを受けることが祈り。豊かにキリストを受けて



いく。そういう意味でこの9節は大変含蓄のある節であります。

●開かれた門

「門」といえば、ヨハネ黙示録の3章のところに、

「7 ヒラデルヒヤにある教会の使に書きおくれ。「聖なるもの真なる者、ダビデの鍵を持ちて、開けば閉ずる者なく、閉ずれば開く者なき者かく言う、⁸ われ汝の行為を知る、視よ、我なんじの前に開けたる門を置く」(黙示録3:7-8)

ここに「開けたる門」とある。

「私は開かれた門である」

と。十字架は開かれた門で、いつでも誰でもが入れる。ただし、傲然としては入れない。傲然として入ろうなんて思ったら、門は閉じてしまうよ。平伏さなければ、十字架の前に。

「参りました。降参しました!」

と言って平伏さなければ。十字架は愛の門ですから。自分を投げ出しているところの愛の門だから。贖罪愛の門だ。

「愛について」なんて言ったってね、愛を受けとるまでは、キリストに現れた愛を本当に存在的にこれを感じるまでは、身体で感じるまでは、愛の何たるかは分からん。

この9節は、神の、天国の牧草、飼い葉、これが私たちにとってこの御言であり、御言は同時にまた御霊の現象している事態です。この聖書の言葉は御霊の現象体ですよ。「御言」なんて言ってね、言葉だなんて思ったらダメです。これはみんな御霊が言に現象したものです。だから、キリストは、

「わが言は霊なり生命なり」

と言われた。「霊なり生命なり」である、そのまま。そこらの人間の思想とは違う。

「聖書の思想は……」

なんて言う人があるけれども、聖書に「思想」なんてものはありはしない。もちろん、ある角度から「思想」と言ったっていいでしょう。けれども、思想として取り扱ったら、聖書の世界はいつまでたっても、頭で分かるかもしれないけれども、聖書が与えようとしているものは受けとるわけにはいかない。

●天門無門

「大道無門 千差路有り 此の関を透得せば 乾坤に独歩せん」^{みち}
^{とうとく}

という。これはいつか私は雑誌に書きましたから、別にまた言いませんけれども。

「キリストは門である」

という。門であって、他に門がない。天国への門はない。しかし、



「このキリストという門は、どこかの教会に行かなければありませんか、武蔵野福音集会という所に来なければありませんか？」

と。そんなもんじゃない。

創世記28章をご覧になればそのことがすぐ分かる。有名なヤコブの夢です。10節に、

「ここにヤコブ、ベエルシバより出たちてハランの方におもむきけるが、
11 一処にいたれる時、日暮れたれば即ち其処に宿り其処の石をとり枕となして

「主よみもとに近づかん」というのはこここのところの讃美歌ですよ。

石をとり枕となして其処に臥て寝たり。

漱石さんは「草枕」なんていうが、これは「石枕」だ。

12 時に彼夢て梯の地にたちいて其の巔の天に達れるを見、又神の使者の其れにのぼりくだりするを見たり。13 エホバ其の上に立ちて言いたまわく、我は汝の祖父アブラハムの神イサクの神エホバなり。汝が臥すところの地は我これを汝と汝の子孫に与えん。14 汝の子孫は地の塵沙のごとくなりて西東北南に蔓るべし。また天下の諸の族汝と汝の子孫によりて福祉をえん。15 また我汝とともにありて凡て汝が往くところにて汝をまもり汝をこの地に牽返るべし。我はわが汝にかたりし事を行うまで汝をはなれざるなり。

「いつまでも離れないぞ」ということですね、神さまの方から。人間の方から、

「われキリストと共に、われ神と共に」

ではない。神さまの方から、

「私はお前を離さないぞ。どこへ行こうと、私はお前に付いているぞ」

と。「付いている」というのは本当の意味で「ついていて」とはそのことだ。あなた方は、キリストが付いてなくては。心配要らんですよ、このヤコブと同じように、

「お前の行くところにはいつも私はいるぞ」と言う。

16 ヤコブ目をさまして言いけるは、誠にエホバこの処にいますに我しらざりきと。17 すなわち惶懼ていいけるは畏るべき哉この処これ即ち神の殿の外ならずこれ天の門なり。」(創世記28・10～17)

ここに「天の門なり」とある。天門。門はない、どこにも。どこにもないが、無門である。禪宗は結局、無の一字だという。

「無というものが門だ。無が本当の門だ」

というのが、無門ということ。門が無いということではない。「無という門」ということ。即ち、キリストは、

「どこどこ集会、カトリック、どこどこに行かなければ、キリストという門には入



れない」

ということはない。「無」というのは、表現できない何ものかということです。二つの面を持つているね。「表現できない何ものか」を無と言うし、そこには「何も無い」という無と。

「何も無いから、しかしながら、表現できない何ものかがある」

というんだ、逆に言う。それが無という字。

だから、無門ということとは、

「至るところこれまた門なり」

ということ。至るところこれ門である。どこにしようとも、そこにキリストという門は開かれている。ちょうど、ここでもって夢を見たところが、実はそこに天門があった。そういうような動き方になれば、もうこれ自在という門ですね。どこにおいても門を発見する。しかし、いわゆる人間の側から決めたような門は一つもない。

「開かれたる門、それを閉ずるものなし」

という。もう行き詰まりを知らんですね。行き詰まったと思ったら、どっつい行き詰まっていなかったという門でしょ。

「どうも私はうまくない」

と、心配することが何ももはやなくなってしまった。

●煉獄に入る門

ダンテが『神曲』の「煉獄篇」第9歌のところで――ちよつとこれは面白いから読んでおきましょう――

「そこに一つの門と、これに至るために下に異なる色の三つの段と、まだもの言わぬ一人の門守かどもりとを私は見た。

と、ダンテは語っている。これは煉獄の本煉獄に入るところの門です。

そこに向かい合い、目をいよいよ開くや、上の段に坐し居る者を見たが、その顔に私は耐え得なかった。彼は白刃を手にして、その光線を我らの方に

「我ら」とはダンテとバージルです。

反射せしめたので、私はしばしば顔を上げようとしたがいたずらであつた。

剣がもの凄く光って、目が眩んでしまう。なかなか面白いね、このダンテというのは。それで正視できないというわけだ。

彼は語り始めた。『汝らの願いをそこより語れ。護衛者はいずこぞ。登り来りて身を損なわぬよう心せよ』。わが主が

バージルのことです。

彼に答えた。『これらのことを知れる天の貴女が

ルチアという、ベアトリーチェでない方です。



今し、「彼女に行け、そこに門がある」と我らに言った。』

だから、ルチアの示しでやって来ました」と。

慇懃なる門守は再び始めた。『彼女が汝らの歩みを善に進めんことを。さらば我らの段に進めよ』。そこで我らは第一の階段^{きんはし}に來た。

段が三段になっているんだね。

それはいと清く滑らかな白い大理石にて、私の姿はさながらに映しだされた。

真っ白な大理石だから、自分の姿がさながらに映しだされた。面白ね。自分の姿があるままに映された。だから、私は「あるがままに」と言う。あるがままの姿で行きなさい、何も繕^{つくろ}うことはありませんよと。ダメならダメのまんま、心配なら心配のまんま、分裂なら分裂のまんま、そのままの姿が大理石に映ってしまうんだから。隠そうとしたって隠れない。

「私の姿はさながらに映しだされた」

と。これがキリストの前に自分を全部、自分を投げ出す行動的告白のすがた。言葉では言い尽くしえない。目は言葉以上に語るといふ。言葉というものは、概念でもって表しているものが言葉という。しかし、目は心の窓という。もし、目が偽っていれば、この偽りの姿がそこに表れる。苦しんでいれば苦しんでいる姿が表れる。動物なんかはなにも言葉がなくなつて、彼らは互いにすぐ分かつてしまう。彼らの行動を直観するからね、行動ですぐ。人間なんてのはその直観力がうすいものだから、言葉なんてものを作ってしまったんだ。まあそれは半分冗談ですけども。

第二は暗紫よりも色濃く縦横にひびの入った荒い焼けた石であった。

焼け石だな。これは告白、懺悔の象徴なんだそうです。

上にかさむ第三の階は脈より迸る血のごとく永遠たる白斑紅石のように見えた。」

と。白い斑点のついているところの紅の石。これは十字架を表している。十字架の血潮を表している。あるがままの姿をもつて、偽りなくキリストの前に自分をさらけ出すときに、十字架は文句を言わずにそれを全部赦して受けとつてしまう。

「大丈夫だ。私はお前がどんな者であろうと、ひとつも咎めない。全部、私は引き受けてしまう。人間はどうの言つたつて、そんなことは問題じゃない。また、

お前自身がどうこうとよくよすることともひとつもいらんよ。」

というのが、十字架のこの絶対の恩寵であります。この恩寵が即ち、愛という言葉の最も深い内容であります。

●愛とはどん底の救い

決定的な赦し受け入れ、これが愛という。だから、愛は救いなんです。可愛がつて愛するのではない。愛とは本当のどん底の救いである。私たちにそういうキリストの救いの愛が、



私たちの魂の中に入ってくると、今度は恐いものがなくなってしまう。

人間だから、エロース的な好きだ嫌いだという、もちろんそういう感情もありますよ。

「好きだ嫌いではないかん」

といって、一生懸命でそういったものを排除したって、それはダメですよ、人間というのは。キリストだってそういう要素も持っていた。けれども、それが何かではないんです、キリストにとつては。それが何かとなったら、それはもう今度はいわゆる好き嫌いというものに支配される人間になってしまう。たとえ嫌いなものであろうと、それをいよいよ救い上げていく。いや、好きなものであっても、それを直接にそれでどうこうと思うのではなくて、その奥の世界でその人を本当によきものにしていく。もはや相対的な判断で支配されないところのものが、このアガペーというものです。

そういうように分けたって、人間は観念ではないですから、そんなことは偽りになる。その奥の世界でもって全部それがもう好き嫌いなんてことは超越してしまったものにみんな変えられていく。それが救いの愛なんです。好き嫌いの愛ではない。救いの愛がくるから、敵を愛することができる。敵を好きになれないです、これは。敵というやつはけしからんでも、それをキリストも、

「偽善なる学者、パリサイ人^{びと}よ」

と激しく言うけれども、ただ憎らしくて言っているのではなくて、

「お前たちは本当に悔改めれば、いくらでも救ってやる」

という激しい愛のひとつの表現なんです。

「神の怒りは愛の別な表現である」

とルターさんも言っているとおりです。そういうことで神の怒りということを見なかったらダメ。神さまは審かんがために審いたのではない。救わんがために審いているだけのなし。サタンは、これを審くために審きますよ、悪いことを指摘するから。

そういうことで、ダンテもここでもって、あるがままの自分をそこに映しだし、投げ出してみたら、十字架で救い上げていくところの、

「もう心配いらん。私に来てごらん。私が今、与えようとしているところのこの青々

とした草をやるぞ」

と。人間の身体だってそうでしょ。あの青汁先生ではないけれども、青汁を、生き生きとした新鮮な野菜を食べると、非常に血液がよくなり、血色がよくなり、必ず百歳は突破するはずのものだと言っている。百寿壮年なんて言う。皆さんも、肉体の問題に対しては、新鮮なものをとるのがいいですね、余り煮たり焼いたりしないで。いわんや魂の世界におきましては、いよいよキリストにおいて現れた神の霊、キリストの霊を受けるにしかずです。

●七つのP

「この上に神の使いが二つの足裏を置き、金剛石のように見、また敷居の上に坐していた。三つの段を越えて高くわが導者は懇ろに私を引き入れて言った。『謙^{へりくだ}って、平伏してということですね。

彼に錠を外すように求めよ』。恭^{うやうや}しく身を清き足下に投げ、憐れみてわがためにこれを開くように乞^こうたが、まず私は胸を三つ打った。

「胸を三度打った」ということは、心と言葉と行為において自分を打ったということで、それを本心に申し訳ないと言って自分を投げ出す姿がこれなんです。

「胸を打ちて云々」

とルカ伝18章にパリサイ人と取税人の祈りのところがあつたでしょ。あの取税人の方は胸を打ちて平伏してどうのこうのと。パリサイ人の方は、俺は断食してどうのこうのと言って、祈っている。どちらが神に聞かれたかと。

「もう自分なんてものとは言つて本当に投げ出しているこの取税人の方が天国に入るぞ」

とキリストが言っている。あれですよ。

「剣の先にて七つのP^{ペイ}をわが額に記^{しる}して、

「P^{ペイ}」というのは「ペッカタ」「罪」という字の頭文字です。

『汝^{なん}うちにあるときこれらの傷を洗え』と言った。」

煉獄でもつてこの七つの罪がだんだん抜かれて、そして最後に天界へ昇っていくというわけです。まあそこはカトリックの世界ですけども。この福音の世界なら、「七つのP^{ペイ}」なんてものはこんなところへ記されない。キリストは直接にもう私たちを天界に、内的天界に入れる。

「お前は既に完全に救われた。だけれども、現実のお前はあいかわらずダメである。だから、その七つのP^{ペイ}はだんだん外されていくよ」

と。その点においてはやはり真理ですよ、ダンテの言っていることは。ただ自分の修行でもつて、自分の信仰の修行でだんだん消されていくという、ただそういった一義的な自力ではもちろんない。

「救われたがゆえに必ずこのP^{ペイ}はだんだん消えていくぞ。いよいよ、キリストの生命をもつて進んで行け」

と。人間ですから、もちろん努力精進したっていいですよ。いろいろな面がありますよ、人間の在り方には。けれども、それがもはや自分が中心となつての努力精進ではない。推進力が来ているから、喜んで努力も精進もできる。それがもはや単なる努力でも単なる精進でもなくなるといふ世界が、この本当に救われて進んで行く世界であります。それが三日月で終ろうが、十日月で終ろうが一向に差し支えない。必ずそれは満月となります。



その「七つのP」は、

「傲慢、嫉妬、怒り、怠け、貪り、貪食そして姦淫罪」

の七つがそうなんです。そういう順序になっっているんです、煉獄というのは。驕り、妬み、怒り、怠け、貪り、貪食、邪淫。これが段々消されていく。そして、Pの字がなくなつてから、ダンテは天界へ昇つて行けるように書いてある。まあ大した詩篇だよ、これは。そういう門。その煉獄の門がちょうど十字架の贖いによつて開かれる。そのところに聖霊のことがまだ出てこないんだな。聖霊のことが出てこないところにちよつとこのところはまだ一歩手前なんだが。聖霊の翼に乗つかつて行くのが、今度は天国へ行くときだけれども。

「私は生まれ変わつていと清き波よりかえり、さながら若葉に装い新たなる若木のごとく清くなり、まさに星にまで昇ろうとする。」
と。これは煉獄篇の最後の言葉です。

●我は善き牧者

はい、それからその先。11節、

11 我は善き牧者なり、善き牧者は羊のために生命を捨つ。

これは詩篇23篇と同じように、

「汝の杖と咎が私を慰める」

とある。牧者というのは、導く杖と、それから外敵を、狼や獅子や盗賊をやつつける杖と二つ杖を持っている。片一方は先が鉄の槍みたいになっている。もう片一方は普通の棒です。二つ持っている。だから、

「善き羊飼いは捨身でその羊を守るぞ、羊のためには生命をも捨てるぞ」

と。イソップ物語に出てくる羊飼いはたいがい悪いやつだな、みんな逃げてしまう。ギリシアの方には善き羊飼いはあまりいなかったとみえる。

12 牧者ならず、羊も己がものならぬ雇人は、豺狼のきたるを見れば羊を棄て

て逃ぐ、——豺狼は羊をうばい且ちらす——¹³ 彼は雇人にてその羊を顧みぬ

故なり。

雇人ではダメだと。時間給みたいのはね。もう羊と一緒になっていないなくては。まあ雇人みたいな牧者になったら、牧師さんになったら、それはいかなですよ。雇人みたいな牧師さんではいかなということ、内村先生が

「自由独立で行け」

と言ったのがそのことです。今でもかなり、またアメリカに依存しているようだな。よほどよくなつてきてはいるようですけれどもね。

14 我は善き牧者にして、我がものを知り、我がものは我を知る、



自分に属するものを、即ち、自分の羊を自分は知っているし、自分に属するものも自分を知っている。「知る」「ギノースコー」という字がたくさん使っております。「善き」「ホ・カロス」という字は、聖書にはそう出てこないんだ、「善」という概念は。それはあることはありますよ、パウロの言葉の中には。

けれども、プラトンの哲学ではこの善が非常に大事な概念です。「至高善」という。ヘブライ語で「トーブ」と言います。「幸いなるかな」「マカリオイ」というのは、善福と書いてもいい。善福あるいは恵福。恵みという字と善という言葉が非常に聖書では近いわけです。「善き」というのは、なにもただ道徳的にいいなんていうのではなくて、恵みを与え幸いをもたらすもの、それが善です。だから、倫理的というよりも、非常に宗教的な概念です。聖書では単なる倫理というものはない。聖書の倫理的概念は全部、宗教的な概念を奥に持っているわけです。もともと聖書の倫理は、モーセの十誡が縦の倫理だからね。

「知る、知る」という。

「あなた方は私を知る、私はあなた方を知る」

ということ、本当に信頼している。知るというのはそういう意味で信頼をもつて知っている。いいところも欠点も知っているかもしれない。けれども、それをなんのかんの計量してたらダメになる。キリストに在って、御霊における現実、御霊における未来、それを本当に信頼をもつて知ってないよね。

内村先生が、

「40歳になるまでは信仰は当てにならない」

と言った。まあある意味においてはそうかもしれない。カーライルも、

「35までは樽をかぶっている」

なんて言っている。35歳まではものを言うなというわけです。壇上に立つてものを言うのはまだ早すぎると。まあなにも年齢がどうということではないけれども、20代にあまり早走ってしまつて伝道なんか始めない方がいい。じっくりと内側を充実させていかなければ。内村先生が、

「青年の信仰なんてものは当てにしないよ」

と言った。とにかく年数をかけなくてはいいかん。

「桃栗三年、柿八年、達磨九年、俺一生」

というような(笑)。ダルマさんでも九年かかっているのだから、そう簡単に進まない。みんな早合点して、早決めしてしまつていいかん。

「キリスト教早分かり」

なんて、あんなものを書くからいいかん。「キリスト教遅分かり」です。「キリスト教常識」なんて、常識ではないですよ、この福音の世界は。「神は愛なり」ということが常識になったらダメです。毎日新しく



「神は愛なり」

ということに驚かなくてはいいかん。常識は、驚いている世界でないから。

●一牧者一群

¹⁵父の我を知り、我の父を知るが如し、

はい、非常にはつきりしている。

「私はお前たちを知っている。お前たちは私を知っている。私は父に知られ、父は私を知っている」

と。「神とキリストと我ら」という関係はもうそうなってくる。そして、

「父我を知り、我父を知る」

というのは、もうこれはちゃんと中に入ってしまったっている。それから今度はこつちに、

「我汝らを知り、汝ら我を知る」

と、ちゃんとなつてしまふ。キリストはまさに「媒介者」(フェアミットラー)です。このキリストという媒介者があつてのこと。

「知る」というのは、すぐ知、知識だと思っている。知的なものを知ると思うから、これがもう既に躓きなんです。だから、聖書研究会で知ろう知ろうと思っている。分かるの分からないのとやつている。

私は今度、キリスト新聞に書いたから、あとで読んであげてもいいけれども。この集会でもキリスト新聞をとつて、全体の情勢を皆さんが知ることは大事なことかと思ひます。即ち、私たちが単にセクシヨナリズムではなくて、このキリスト教の歴史を担っているものとして、その一環として全体の情勢を大きな目で見るといふことをやらないといかん。

¹⁵父の我を知り、我の父を知るが如し、我は羊のために生命を捨つ。

この「生命」といふ字は「プシヘー」と書いてあります。

¹⁶我には亦この檻おりのものならぬ他の羊あり、之をも導かざるを得ず、

これは不思議なことを言う。この「ざるを得ず」は強い。

「どうしても私はそれも導くよ」

という。どうしても導くよというのがこの「ざるを得ず」なんです。しないではいけない、必ずするよという。ざるを得ずという生き方が一番力強い生き方だと言つたでしょ。われかくせざるを得ずと。

彼ら是我が声をきかん、遂に一つの群ひとりの牧者となるべし。

これがなかなか成らない。今でもキリスト教界はついに一つの群れとならない。いいですよ、それぞれの群れで。武蔵野福音集会はひとつの小さな群れだよ。けれども、キリストがここで言っているのは、

「たくさんいろんな群れがあつて結構だ。しかし、それは渾然として一つになるか



ならないか、宗派争いなんかやっているか。一群だ。一牧者一群と。

それぞれの在り方は結構でござる。ただ、そこに一つになるためには、申すまでもなく、各在り方に聖霊が来てなくてはいいかん。キリストの霊が来てなければ一つにはならないということです。在り方は点々バラバラでよろしい。けれども、「ああ、そうだ」と言ってお互いに握手ができるためには、聖霊がなければ握手ができない。やれカトリックだ、プロテスタントだ、無教会だ、何だかんだと。何だかっていい。そこに本当に聖霊が来ていれば、何を限定するかと。それが本当の一つなんです。

ギリシア語で「牧者」という字と「群れ」という字が非常に似た字だから、おもしろい。「牧者」のことを「ポイメーン」という。ところが、「群れ」のことは「ポイムネー」という。「一つの群れ」は「ミア ポイムネー」、「一つの牧者」は「ヘイス ポイメーン」と書いてある。「遂に一つの群ひとりの牧者となるぞ」

と。けれども、それが本当に成るときはおそらく地上では来ないでしょう。クリスチャンが本当に御霊を宿すクリスチャンにならない限りはダメだということです。

●「原始力」(キリスト新聞「橄欖」への寄稿文)

キリスト新聞の「橄欖」に、私は四回に分けて書いた原稿があるから読んであげよう。今日のところに関係があるから。「原始力」という題です。

原始力(一)「私は在って在らしめる者」(出エジプト3・14、私訳)

1968年2月3日掲載

「広島 長崎に原子爆弾が爆発して以来、20世紀後半は正しく原子力時代に突入した。それ自体は無にもひとしい原子核がフィッション(核分裂)現象を起こすと、あの驚くべきエネルギーを出す。物質の極微の原子構造に、我らの太陽系がちよつと似ているといわれる。太陽は自然的存在としてのわれらの原子核といえるであろう。太陽があることがわれらの地球と地球上のあらゆるものを在らしめている。その太陽が核爆発現象を不断にいとんでいるといわれる。その発する光熱がわれらの自然的生命のエネルギーの源であることはあまりにも自明な事実である。

自ら在ることが他を在らしめている太陽よりも、はるかに根源的に自在が他在の根拠たるものは何か。それは被造物からは端倪すべからざる創造主である。

この神が、モーセにホレブの山でヤハウェー神として自現した。そしてモーセの問いに対して、「私は在って在らしめる者」(私訳)といいなされた。宇宙の存在根拠たる神は霊的実在者である。

「何々と言われる」という敬語的表現はヘタすると受身に聞こえるから、私はなるだけ、敬語の「なさる」という言葉を使う。「あなたはなさいますか」と言うでしよ、「なさる」とい



うのは「する」の敬語なんです。

そのことは、イエスが、「神は霊である。だから拝する者も霊とまことをもって拝すべきである」(ヨハネ4・24、私訳)と喝破なさったことによっても明かである。自然的存在としてのわれらは、太陽を思っ生きていない。太陽の光熱を身に浴びて生きている。然らば、たましいを存在の中核としている霊的存在としてわれらも、霊神の霊を浴び、受霊してこそ生き得るのである。」

これが第一回です。それから、第二回、

●原始力(二) 「来てごらん！」(ヨハネ4・29、私訳)

「霊神から直接に受霊した最大の神秘家は、東西古今に絶する神の人イエスであった。神がどうのこうのと議論したり、質問したりする者には、あのサマリヤの女といっしよに、「来てごらん」(ヨハネ4・29、私訳)といって、四福音書のイエスのもとにつれてゆくのが最善の指示である。

あの「来てごらん」というのが、ギリシア語でちょうど「来て視よ」ということです。も
う今の訳では調子が出てこないから、みんなこれは自分の訳ですよ。

私には聖書はドラマである。このドラマは読者をその劇中にひっぱりこむ。この劇中に躍り込み、体あたりにその現実の人となろうとしないなら、絶対に劇の幕は開かない。それなのに、聖書研究会といった角度で聖書を厳密に、微に入り細をうがって解剖するいとなみの何と多いことが。それでは聖書が与えようとしている霊的生命は断じて得られない。

福音書のイエスにぶつかって、わかるのわからないのではない。あの驚くべき言動の前に文句なしに兜を脱ぎすて平伏して降参するまでは聖書の霊的現実には入れない。イエスはその言説に水をわらない。その行動は棄身である。どの一言も極限概念を持ったどん底的なものである。どの行為も根源現実のものである。しかも彼の言動は大自然よりも自然である。

ところであの神韻玄妙なる言、神出霊妙なる動の当体たる彼自身は、「私は自分からは何をする力もない」(ヨハネ5・20、私訳)と言い、「私の教えは私のではない、私を遣いなさった者のである」(ヨハネ7・16、私訳)と告げ、「何で私を善きなどと言つか、おまえは。善き者などはいないよ、神ひとりのほかに―」(マルコ10・18、私訳)などとさとしている。まことにイエス自らは無力、無教、無善なる者。すなわち無者で彼はあった。」(武蔵野福音集会主宰)

これが第二番目。それから第三番目。

●原始力(三) 「あなたの御意が成りますように、天におけるように地においても」(マタ



イ6・10、私記

「無者なるイエスの実存の基調は、「あなたの御意が成りますように、天におけるように地においても」(マタイ6・10、私記)であったことは疑いを容れないところである。「地においても」とは、この地上の私を通してとの挺身の態勢をその根底にもつていたこと確かである。すなわち、聖意体现の自己献供の相である。彼自身が無私となり、神一切となっている現実、彼の祈りはそれゆえ神に全我を投入することであった。神の本願に全我を全托して神のふところ祈っているひとであった。

「幸なるかな、霊の貧しき者たち。天国はその人たちのものである」(マタイ5・3、私記)とは、根源的には、イエス自らの私心なき無私の実存の体験から迸った告白である。「霊とまごともつて拝する」とは、全霊を注ぎだし、あるがままの全身を投げかけて祈る、ということである。そのようなイエスの全存在に神の聖霊が満ちあふれた。そこに彼のあの驚くべき聖言と聖業があらわれた。その聖言は、「私がおまえたちに語った言は霊であり、生命である」(ヨハネ6・63、私記)と告白なさったもので、意味がどうの解釈がどうのではない。聖言自体が霊であり、生命である。

このことは聖霊を受けるまでは、本当には体感できない。端的にいうなら、イエスこそ神の原始の力、原始力そのものである。「神の国は言にはなく、力にある」(第一コリント4・20、私記)とパウロが言った消息もそこにある。無力に徹したイエスこそは無量力の人であった。聖霊がその実体である。この霊的原始力は物理的な原子力とは次元がちがう、質がちがう。この聖霊という原始力を受霊しないで何の福音であるか、何の信仰であるか。」

そして、第四番目。

●原始力(四) 「キリストのみたまのないものは、キリストのものではない」(ロマ8・9、私記)

「英雄ナポレオンが孤島セントヘレナ幽居のとき、聖書を繙いた。そのとき彼は感動して、こう告白したという。「福音書は書物ではない。活力ある生きものである。これは福音の伝播を阻む一切のものを引きさらってゆく力を持っている。……私は、くり返しこれを読んで飽きない。……キリストは愛の炎を燃え立たせる。これによって何ものよりも強い自己愛は粉碎される。……あらゆる時間的限界をぶち破って、人間の心を不可視なるものへと高め、こうして天界と地界の間に不壊の絆を創造することを成し遂げたのは、ひとりキリストのみである。……全世界で愛慕され、祈願され、伝道されているキリストの永遠に生ける国とこの私のどん底のみじめさとの間には何たる深淵があるのか」(私記)。これはヒルティーがその著『病める魂』(克蘭ケ・ゼーレン)の中で引用しているナポレオンの言の一部であるが、私はさすがにナポレオンだ



と思った。キリストの前に完全に兜を脱ぎすてた男らしい言葉だ。

現代は第二の宗教改革を要する。否、人間革命と申したい。キリストの十字架は万人を無条件に無私の愛の世界に贖い入れる門である。この門前に平伏し、あるがままのおのを投げ出して祈り、この門を透得すれば、そこは聖霊の光の満つる原始力の世界である。かくて聖霊のバプテスマを現実を受けるのである。単なる信じ仰ぎではダメである。十字架の贖罪愛を信受、体受したら、聖霊を浴びて靈交の現実に入ることができる。信仰は信交である。キリストの愛という原始力は一切を救いあげる勝利の力である。このような力ある聖霊を賜って靈愛の現実を絶叫しているのがパウロのロマ書第八章である。使徒的信仰に立ち帰ろう、現代キリスト教界よ！」（1968年3月24日）
そういう文章です。

●復活の生命を得て与えるため

一つの群れ一つの牧者ということ。私たちは、どんなに世界の事態が分裂していても、一つの群れであるということこそ悲願として、そういった天国、最後の新天地を夢見ながら、悲願として進んで行くときに、本当の喜びが、愛が私たちの中にいつも燃えるわけです。さきほどの牧草まきぐさという「ノメーン」という字ですが、「牧草、牧場」をドイツ語で「ヴァイデ」と言いますが、同時にこれは抽象的な言葉では「歓喜、喜び」を意味する。いかに喜びの音信であるか。

とにかく、この信仰の世界は現実には、あなた方がもし生き生きとしたクリスチャンでなければ、それは聖霊が来ているとはいえない。聖霊が来れば、何かしらあなたが本当に底力とまた底抜けの歓喜をうちに宿しているひとであるはず。しかも、その聖霊はいつかあるときも、あるがままの自分を投げ出して、「主よ！」と一言祈れば、直ちに聖霊の世界です。これが仏教でいう、

「南無阿弥陀仏」

「南無妙法蓮華経」

が本当に称えられれば直ちに極楽の世界であるのと同じことです。クリスチャンが、

「主イエス・キリストよ、主よ」

という祈りがそれだけの質を持ったものにならなくてはいいかん。

あなた方、祈る時に「お父さま」だとか、「主」という言葉をいい加減に言葉の間に挟んだような祈り方をしたらダメですよ。言葉の間に挟んで、なにか繋ぎ目みたいな、そういう祈り方はなるたけしないように。本当に「主よ」とか、本当に「父よ」と言うときは、全存在を投げかけて祈っていないとね、浮いてしまうから。

17 之によりて父は我を愛し給う、それは我ふたたび生命を得んために生命を

捨つる故なり。



復活するために、お前たちの贖罪のための十字架に生命を捨てて、今度は復活の生命をお前たちに得るために――ただ「得る」ではない――もちろん、得て与えるためです。生命の世界は、与える世界ですから。「永遠の生命」というと、キリストのこの驚くべき贖罪を通しての愛を受けとらなければ、それは永遠の生命といったって、いくら冥想したってダメですよ。

彼らも甦りのキリストにぶつかり、そして、

「祈って待つてろ。私の中の生命をやるから」

と。与えて尽きざるもの。太陽の光もそうだし、この空気もそうだし、水もそうです。我々の普通の生活の中で、水とか光とか空気とか、これを冥想するだけでもう聖霊の事態がすぐ受けとれるわけです。

18 人これを我より取るにあらず、我みずから捨つるなり。我は之をすつる権

あり、復これを得る権あり、我この命令をわが父より受けたり』

お前たちが私を十字架にかけるのではない。十字架には私は自分でのぼるんだ。もう散々お前たちは私を十字架にかけるが、

「我みずから捨つるなり。我は之をすつる権あり、復これを得る権あり」

と。権威はこっち側にある。神さまの命令なんだと、私は捨てるのは。それでなければ、人の世をいかんせん、人の世を救うことをいかんせん。救いのために捨てる。救いのためにまた与えるんだと。

我この命令をわが父より受けたり』

なんと、権威ある言葉かと思えます。

どうぞ、10章を読みまして、

「どうということが書いてあったか」

ではないですよ。どういう現実を今、私に、あなた方に、一人びとりに与えようとしているか。それを自分が羊となつて受けとらなければ。自分が羊となつて受けとる。キリストは小羊となった。キリストは牧者であると同時に、門であると同時に、小羊、羊である。

私たちもどれにもなれる。人々を救いに入れる門となります。自分自身が小羊となります。我々が本当に牧者となります。

そういう、何と言いますかね、もう聖書が身に付いてしまう。

「これは私のからだの一つの表現ですよ」

なんてなことにみんな、一人びとりがならなくては。もう聖書一卷あれば何をか恐れんと。一卷というのは、そういう意味で、身に付いてしまっているから、これは無限の生命がくるから。では、そこまですておきます。

